表現者たち

日本画家 いのうえあいさん（静岡市清水区）

揺れ動く 一瞬の美しさ

「揺れ動くもの、不思議さを表現していきたい」と話すいのうえあいさん＝静岡市清水区（写真部・宮崎隆男）

目の前にあるものが、何であるかを知る前に触れる不思議さ。「草花をじっと見つめる、虫を捕まえようと手を伸ばすのに捕まえられない。幼子が『これは何？ なぜ？』と抱く瞬間は尊い」。日本画家いのうえあいさん（35）＝静岡市清水区＝は、今月中旬に始まる個展の出品作「不思議」に、その思いを込める。

愛媛県に生まれ育ち、美術科の高校で初めて学んだ日本画が「しっくり来た」。白緑青、柳葉裏、岩緋（いわひ）―。「岩絵の具自体の美しさに加え、光を柔らかに吸収して反射する特性に引かれる」。筑波大大学院を経て24歳の時、常葉大短期大学部の保育科教員として静岡にやって来た。

写生、下絵、転写、着彩。段階を踏むごとに筆の線を精査していく。「形に厳しく。輪郭がバラバラにならないように」。一方、下描きには墨を用いると、水の流れによって予測できない絵肌やにじみが現れる。「岩絵の具の粒子も、自分の思いとは関係なく動く時がある。その意外性に助けられる」という。

岩絵の具を1色ずつ絵皿で溶く時間は「儀式のよう」。「どう描き進めるか、考えを巡らせたり、勢いだけで描かないように一度落ち着かせたりする時間」と明かす。

日本画のモチーフは「花鳥風月」に代表されるが、「梅や桜などいわゆる『絵になる花』よりも、小さい野の花の生命力に引かれる」。作品「不思議」の女児が座る周囲にもカラスエンドウ、ツクシ、スギナなど春の草花が広がる。ハハコグサの黄色い小花には、一つ一つ顔料を盛り上げ、ふっくらと仕上げた。

個展出品作の一部。中央の作品は、地面に落ちた椿や桜の花びらに引かれたという

静岡に来て、1年半に1度のペースで個展を開く。「揺れ動くものはその時にしかない。子どもと大人の間、美しさに潜む危うさなど、一瞬の姿、表情を表現していきたい」と語る。

（教育文化部・岡本妙）

■■■

第6回いのうえあい日本画展は17～28日、静岡市葵区の亀山画廊で開く。

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます